H

文化・地域づくり
スポーツ・その他

竹久夢二の翻訳・翻案研究

デザイン学部ビジュアルデザイン学科　風早由佳、野宮謙吾、柴田奈美

竹久夢二が活躍した明治・大正期の日本の児童文学は、翻訳文学と言えるほどに外国の児童文学の翻訳、翻案が数多く刊行され、現代まで続く近代的日本児童文学の源流と見なすことができる。特に日本児童文学史上、芸術的な童謡、童話を創出することを目標に掲げた雑誌「赤い鳥」は、近代化を目指す最初の大きな運動として西洋の近代的子ども観や思想、教育理念を背景に、それまでの勧善懲悪的な御伽噺とは異なる文学を生み出した。この時代にあって、夢二は他の作家に先駆けて英米児童文学を数多く翻訳（翻案）している。

本研究では、夢二の文学における「子ども」のイメージ形成に西洋の文学と近代的子ども観がいかに影響を与えたのか、夢二による童謡の翻訳（翻案）を中心に取り上げ考察した。夢二の文学、挿絵作品においては子どもが重要なテーマであるが、夢二の子ども観はこれまで深く議論されていない。本研究を通して、新たに複数の童謡の翻訳（翻案）を発見した他、これまでに未発見であったグリム童話等の童話からの夢二翻訳（翻案）を発見し、西洋文学に表される子ども観が夢二の創作における子ども観の醸成に寄与していることを明らかにした。

さらに、これまでに研究がなされていない夢二の英詩翻訳の手拓本を調査し、夢二による手拓本への書き込み資料を入手することができた。この資料をもとに、夢二の外国童謡・童話の翻訳（翻案）における作品の取捨選択の特徴を分析し、夢二の文学作品・挿絵を特徴づける異国風の描写は、英詩、とりわけマザーグースの影響を強く受けていることを明らかにした。一方で、マザーグースの特色の一つであるナンセンスをテーマにした詩は夢二の翻訳において訳出されにくい特徴がある。夢二にとってナンセンス詩は、テーマや場面設定、リズム特徴を引き継ぎながらより創作性の高い翻案を生み出す源となっていることが指摘できた。

（本研究は、両備樫園記念財団の研究助成を受けています）

連絡先　風早由佳　kazahaya.yuka@dgn.oka-pu.ac.jp

山口誓子の『凍港』に見る短歌の影響（２）

デザイン学部ビジュアルデザイン学科　　柴田　奈美

山口誓子は、現代俳句の革新者として俳壇史で有名であるが、その纏まった研究は未だ進んでいない。特に、誓子の俳句革新の方法を研究するのに欠かせない短歌の影響に関する研究が少ない。神谷かおる氏の『和歌の構造史』の一部で茂吉の影響が、また松井利彦氏の『近代俳論史』の中の一部で、茂吉、若山牧水、小泉千樫の影響が指摘されているにとどまっている。

前回の発表では、句集『凍港』に、茂吉の言葉の選択方法や素材の拡大方法を意識して自作に取り込んできたことを確認したが、特に都会素材を集中して作品化されたのは昭和5年以降である。この変化の原因として、茂吉以外の歌集の影響が想定できるのではないかと考えられる。

本研究では、『俳句の復活』におさめられた「連作俳句」に紹介された小泉千樫に注目し、その影響と、なぜ都会素材摂取の影響歌人として千樫を挙げなかったのか、その理由を考察した。

誓子は「連作俳句」の中で、千樫の短歌の連作群の秀逸さを評価している。ここで、千樫の歌集を通読すると、連作が多いことの他、都会に取材した素材が多いことに気付く。これらの作品は茂吉の短歌のようにインパクトのある表現はなされず、短歌らしい韻律に溶け込んだ穏やかな言葉が選ばれていた。千樫の歌壇の評価は、抒情的で破綻や変化の少ない作品で、写実の輪郭がはっきりせず、根源的で突き上げるような迫力がない、という厳しいものであった。強烈な「茂吉用語」に惹かれた誓子も同様の印象を抱いたと考えられる。誓子が素材の拡大について述べる時に、千樫の作品を都会素材摂取にヒントを受けた歌人としては挙げなかったのは、この根源的なところが肯定できなかったからではないだろうか。根源的な改革精神と、そこから創造されイナミックな作風を茂吉から受け継ぎ、都会を詠む直接的なヒントは『屋上の土』の発刊された昭和3年5月以降に、千樫から得たと考える。

連絡先　柴田奈美 shibata@dgn.oka-pu.ac.jp

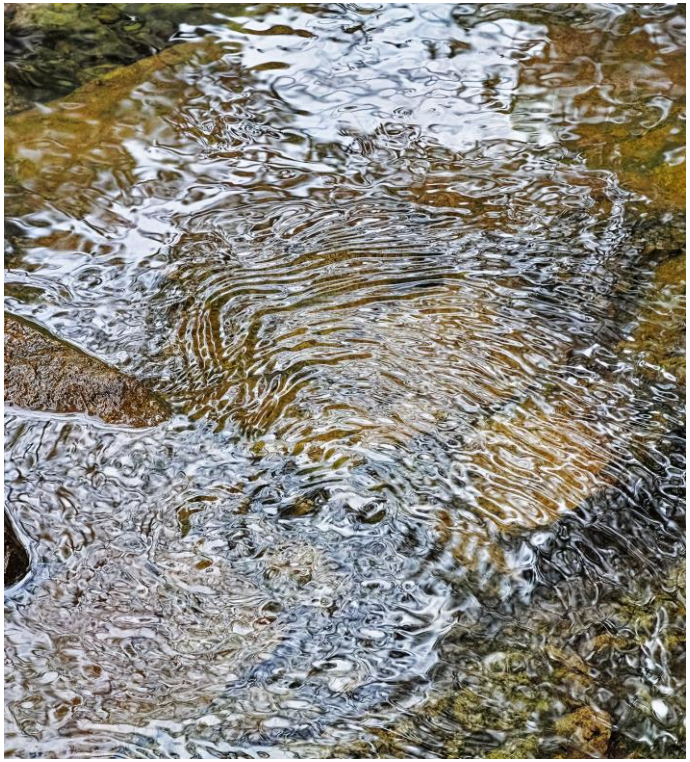
スティッチング技法を用いた作品制作３

デザイン学部ビジュアルデザイン学科　北山由紀雄

「Multi-dimension（多次元）」シリーズでは、上下方向で分割撮影し、その画像を合成して作品を制作している。今回の作品は、上下の分割撮影を行う際に、それぞれの構図において、フォーカス位置を後ろ側から手前にかけて少しずつ移動させ、３～５回に分けて撮影を行っている。これら画像を求めるイメージになるよう、それぞれのフォーカス位置でセレクションし、手動で深度合成して上下それぞれの画面を創り出し、最終的にこの上下の画面を合成してパンフォーカスの高細密画像に仕上げている。

撮影場所は、岡山県総社市の木々の覆い被さる小さな渓谷である。直射日光が殆ど差し込まず、木漏れ日が時折射す様な場所なので、絞り込んでの撮影では、シャッタースピードは遅くなり形を捉えられない。感度を上げての対応にも限度があり、更には絞り込むことでの回析も考慮に入れ、この方法を採用した。

撮影から、撮影後のセレクション、合成に至るまで、極めて手間の掛かる方法だが、そこで感じた印象を、よりリアルに再現する方法として有効なものであると考えている。

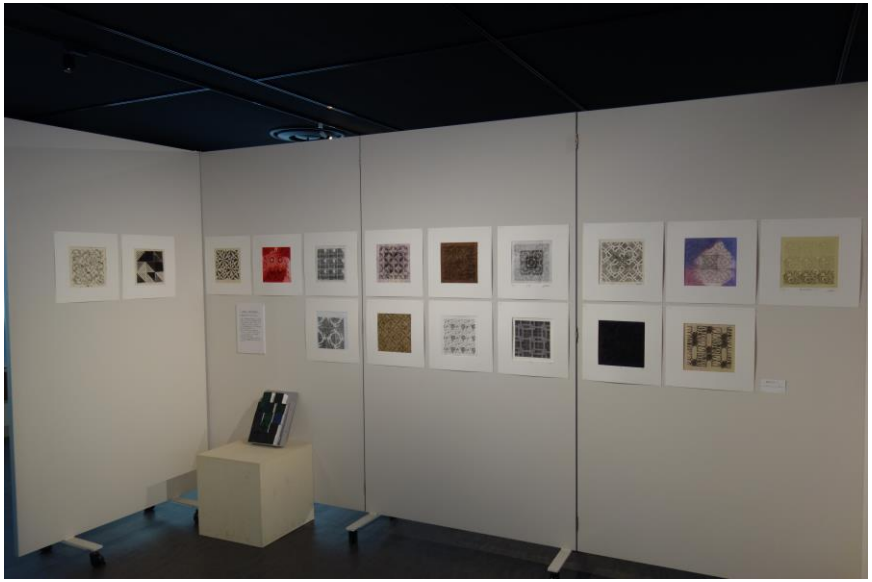


連絡先　北山由紀雄 ktym@dgn.oka-pu.ac.jp

プリンティング表現の教育・普及に関する研究

デザイン学部　造形デザイン学科　関﨑　哲

研究は、造形表現の分野においてプリンティング表現が持つ「素材に触れながら思考を深め作品化するというプロセス」の重要性を示し、造形教育の場にどう活かしていくかその方法を提案することを目的とする研究である。今回は「版を通して世界をみる」をテーマとした展示について報告する。多様性が叫ばれる今日、「版」という“限定”された素材と技法によって表現することにどんな意味があるのか、そこからどんな多様性を持った表現を生み出すことができるのか、を示すような展示を試みた。



版表現の楽しみⅦ,版を通して世界を見る　吉備路文化館 令和4年5月12日～13日（主催:関崎研究室,総社市教育委員会 ）

＊版表現の楽しみⅧ「ゆだねるということ」は、吉備路文化館にて、令和5年4月14日～ 5月11日に開催。

連絡先　関﨑　哲 sekizaki@dgn.oka-pu.ac.jp

美術館コレクションを活かした地域文化活性化のための連携プログラムの実践研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科　島田清徳、難波久美子、真世土マウ、作元朋子、渡邉操、今田千裕

代表的な地域産業の繊維（テキスタイル）と陶磁（セラミック）を核とした工芸系デザイン教育と県内文化施設を連携させ、“ものづくり”を活用した本事業を継続的に実施することにより、県民が文化に親しむ機会を増やすとともに地域文化の発展に寄与することを目的とした。（令和４年度 地域連携事業）

高梁市成羽美術館においては、成羽地域産出の植物化石をモチーフとし、美術館との協働により学生がミュージアムグッズを企画制作した。成果物はミュージアムショップで一般公開し、地域資産である美術館コレクションの魅力を発信した。

岡山県立美術館では、屋内広場展示のほか、美術館を訪れる幅広い年齢層が参加できるワークショップを、学生と美術館の連携により開発し、染色、窯焼成等の体験を通してものづくりの魅力を発信した。これら美術館との連携事業は、新型コロナ感染防止対策を徹底した上で、対面形式で実施した。

以上の地域連携事業の成果発表は、新型コロナ感染防止対策を徹底した上で、学生によるYouTubeやInstagramによる成果物等の動画配信も活用しながら、山陽新聞社さん太ギャラリーにおいて展覧会形式で実施した。（右の写真は令和３年度の展示の様子）

連絡先　島田清徳　textile@dgn.oka-pu.ac.jp

イタリア・ルネサンス建築における古典主義の多様性とその特質

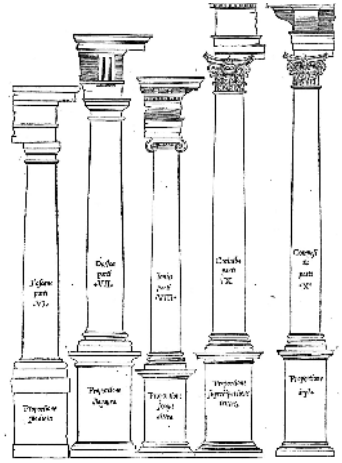
独創

デザイン学部建築学科
デザイン学研究科デザイン工学専攻　岡北一孝

ヨーロッパにおける古典主義の大きな側面を規範の再生現象とするならば、古典主義の周期的回帰は、西洋文化の特質であり、芸術創作の本質と言っていいように思われる。
しかしながら、古典主義の出発点ともいえるルネサンス建築の建築史研究においては、古代ローマ建築＝古典ととらえられ、その形式的な再生が古典主義と理解されている。そこで本研究はルネサンスにおける「古典」の範疇を再考し、またその再生の多様性を考察することで、古典主義の創造性の一端を明らかにする。その結果、ルネサンスにおける古典主義が、古代建築の単なる形式的反復ではなく、過去の多様な建築の理解にもとづく、創造的な再生であり、その多様性こそが、ルネサンスが理想とした古代建築の本質であったことが明らかになるだろう。古典主義が芸術家の保守的傾向とデザインの限界ではなく革新性の一形式であることを示すこことへとつながると考える。

テンピオ・マラテスティアーノ

ルチェッラーイ礼拝堂



Regole generali di architetura ... , Venezia, F. Marcolini, 1537.

連絡先　岡北一孝　ikko_ok@dgn.oka-pu.ac.jp

ヴィデオのスチルイメージを素材とした平面表現

独創

保健福祉学部子ども学科　　児玉 太一

本稿は動画編集のアプリケーションから連番出力したスチルイメージを平面表現に展開した作品シリーズ、”After Image”の研究報告である。”After Image”は主として人間の手の動作を被写体に、数分のヴィデオから連番出力した数千枚の静止画像をイメージの素材として用いた一連の作品シリーズで、ヴィデオから出力した数千枚の静止画像から任意に選択した複数枚のイメージをシルクスクリーンを介した写真製版によって紙やアクリル板に積層している。

支持体に積層するイメージは連番で出力したイメージであることから、わずかな時間の差によって、手や物のイメージの位置が異なり、時間による実際のイメージのずれを生じさせる。また、アクリル板の厚みによって、両面のイメージは互いが完全に重なり合うことはなく、鑑賞する角度によってイメージのずれが生ずる視覚上の効果が発生する。

2022年度に取り組んだ右記の作品”After Image_22_01,02”では、同一のヴィデオファイルから制作した作品２点をユニットとした組み作品とし、版となるイメージの組み合わせ、イメージと作品毎に変更するインクの透明性など、複数の要素によって異なる作品となる、自作品のヴァリエーションの在り方について示した。

九州産業大学美術館における展示風景

連絡先　児玉 太一 taichi_kodama@fhw.oka-pu.ac.jp

倉敷物語館多目的ホールにおける現代舞踊作品上演の試み

DANCE ALIVE 実行委員会 代表　新山順子（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）
実行委員　　黒川しのぶ　土屋望　矢鳴孝一郎　矢鳴千奈美　若林真由美　岡本悦子

【はじめに】我々は，大学卒業後も現代舞踊を中心とする創作表現に地域で継続して取り組めるように，2016年より実行委員会形式でDANCE ALIVE（ダンスアライヴ）の活動を開始した。主事業として年１回の現代舞踊公演を行っており，2023年１月には倉敷美観地区内にある倉敷物語館多目的ホールで公演を行うことを企画した。倉敷物語館多目的ホールは，伝統的な和風建築の建物で，その環境は現代舞踊作品の上演に独特の趣を与えてくれるものと考えられるが，一般的な公共ホールに付随する様々な設備はなく作品上演には工夫が必要である。本研究では，現代舞踊公演 DANCE ALIVE 2023の実践を通して，倉敷物語館多目的ホールにおける現代舞踊作品上演のための工夫や，伝統的な建物で現代舞踊を上演する魅力などについて考察を行う。

【取組みの概要】

１．上演のための環境づくり　倉敷物語館多目的ホールは，倉敷美観地区の入口に位置する古い木造和風建築の建物で，床の広さは1,120cm×550cm（長方形）である。中央部に2本の柱があるが，その他には何もない空間で自由に会場を作ることができる。 DANCE ALIVE 2023では，客席を20席用意し，建物奥の柱と柱のあいだを舞台（間口350cm×奥行260cm）として上演環境を整えた。小規模公演であるため，照明もプロに頼らず，既にある会場の照明と持込照明で行うことにした。同様に，音響も持込みのスピーカーとパソコンにより操作することとした。

２．倉敷物語館における作品上演　DANCE ALIVE 2023は，2023年１月28日に夜公演・29日に昼公演を開催し，全９作品を上演することができた。倉敷物語館多目的ホールの魅力としては，会場自体に歴史を感じさせる重厚な趣があり，入場した時点で非日常感を味わえる点，伝統的な建物と現代舞踊とのマッチングを楽しむことができる点などが考えられた。

連絡先　新山順子研究室　E-mail：niiyama@fhw.oka-pu.ac.jp

画像解析による足跡鑑定手法の検討-遺留足跡と被疑者足跡の対照の試み-

独創

情報工学部人間情報工学科　　齋藤誠二、山内仁、小枝正直、大山剛史
情報系工学研究科システム工学専攻　岡本光平

犯罪にかかわる科学捜査には様々な手法がある．その一つに足跡鑑定がある．足跡鑑定では，犯行人数，犯人の動き，着用靴の種類，犯人の身長，犯人の動作などが解るといわれている．しかしながら，指紋鑑定やDNA鑑定のように確立された鑑定手法はない．一方，研究が進められている歩容認証は，「人の歩き方には年齢，性別，感情・健康状態といった様々な情報が含まれている」ことを前提として行われているが，足跡についても同様の情報が含まれていると考える．そこで本研究では，足跡からその人物の特徴を抽出する手法を確立し，足跡鑑定の新たな手法を開発することを目的とした．

本研究では，遺留足跡と被疑者足跡の対照から別人物判定率を求める方法として2つの分析を試みた．1つ目は，採取した足跡に対して2値画像を作成して，関心領域内の有効画素の個数を算出した．その個数をもとに足幅方向の重心を求め，重心移動予測線のDPマッチングの結果から別人物判定率を求める方法である．2つ目は，採取した足跡を6分割して，エリアごとの濃淡値出現率をヒストグラムマッチングすることで別人物判定率を求める方法である．

分析の結果，重心移動予測線のDPマッチングでは，約60％の精度で個人識別が可能であることが示唆された．また，ヒストグラムマッチングでは，40～50％の判定率であった．

検証実験として，1名の遺留足跡に対して3名の被疑者足跡を2つの方法で対照したところ，1名の被疑者が浮かび，1名の遺留足跡（犯人役）と同一人物であることが確認された．

一方，本研究は1種類の靴のみの検討であり，他の靴の場合でも同様に鑑定できるかは不明である．また，実験では分析に充分な足跡（足裏の全体像が写っている）を採取できたが，特に遺留足跡の場合は，一部が欠けていたり，ソールの意匠が鮮明ではない場合がある．このような場合でも，本研究で検討した鑑定手法が有効かどうかは検討の余地がある．

連絡先　齋藤誠二 s.saito@ss.oka-pu.ac.jp

上肢の両側運動を実現するための認知特性に関する研究

独創

情報工学部人間情報工学科　　大山剛史

両手の同時運動について、左右が同じ運動を生成するときと比べて別々の運動を生成するときは運動生成が困難になる。この理由として半球間の信号の干渉が報告されているが、それだけでは説明できない実験結果が報告されてきている。

本研究は、両手の同時運動の困難さについて、半球間の信号の干渉のほかの要因として、平面上での運動軌道の一致・不一致が関与するという仮説のもと、実験を行った。

図1に示すように、水平面、前額面、矢状面で右手と左手を同時に回転させる課題を設定した。鏡像条件では右手と左手の回転方向が正中線を境界に鏡像となり、非鏡像条件では鏡像にならない。

非鏡像条件において、水平面と前額面では回転方向が鏡像ではなくとも、平面上での左右の軌道は一致する。一方、矢状面では回転方向が鏡像ではないことに加えて、平面上での軌道も一致しない。したがって、矢状面はほかの平面よりも運動をしづらいことが予想される。

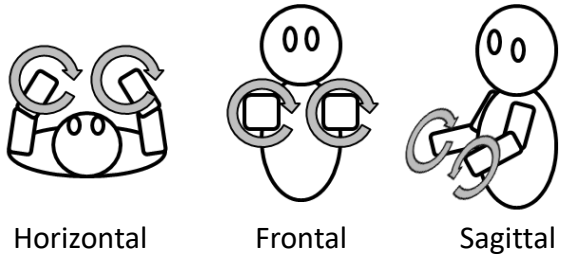


図1　三平面での回転運動．右手の回転方向は鏡像/非鏡像条件で変化

運動のしやすさを軌道のピークの時間差で評価した結果、図2に示すように、矢状面のみ鏡像 vs 非鏡像で有意差があり、仮説の妥当性が示された。

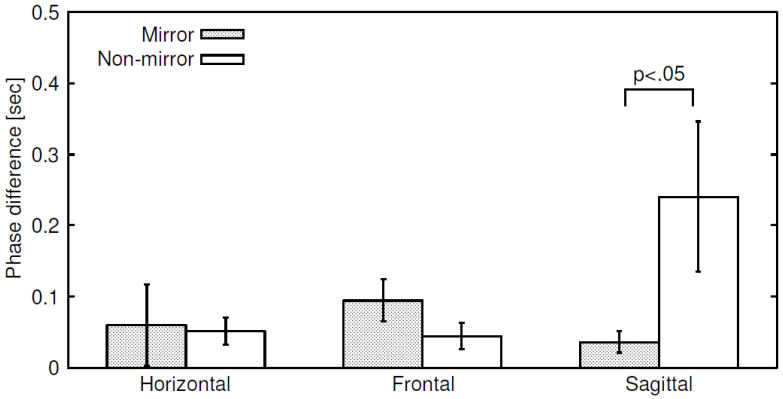


図2　左右の軌道のピークの時間差

連絡先　大山剛史 ooyama@ss.oka-pu.ac.jp

生体の運動制御機構のモデル化に関する研究

情報工学部 情報システム工学科　　山崎大河，忻欣，泉晋作

生体の運動には、関節間協調、筋間協調など、身体の様々なレベルの構成要素の間に「協調」がみられる。これは脳が身体の膨大な自由度を操って、その目的を達成するための重要な仕組みと考えられている。本研究では、この協調に着目して、様々な運動制御を制御・ロボット工学の視点でモデル化している（下図は例）。その知見は生体の理解だけでなく，機械の制御や医療福祉・スポーツ機器の開発などへの応用も期待できる。

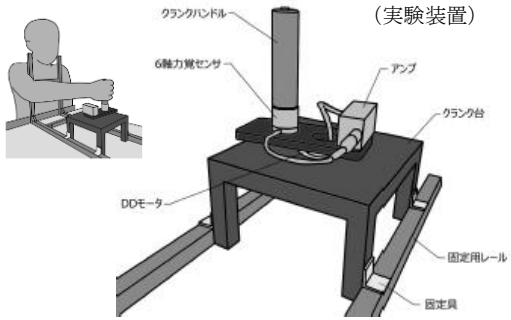


図1：クランク回転作業

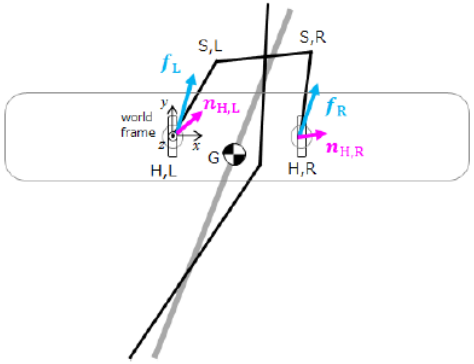


図2：体操・あん馬・両足旋回

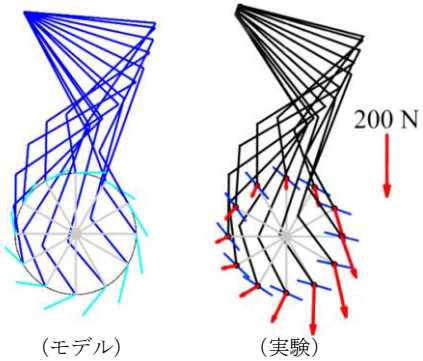


図3：自転車ペダリング

参考文献

- 城崎和輝，山崎大河，忻欣，泉晋作：冗長な座標系を用いたクランク回転作業の運動制御モデル，第64回システム制御情報学会研究発表講演会，pp. 990-993 (2020)
- 山崎大河，大内祐基，城崎和輝，忻欣，泉晋作：自転車ペダリング動作の運動制御モデル，日本人間工学会第61会大会講演集（人間工学，2020，56 巻，Supplement号） (2020)
- 山崎大河，忻欣，泉晋作，名和基之，西脇一宇，あん馬旋回の運動制御モデルに関する検討，日本機械学会 シンポジウム：スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス2022 (SHD 2022)，C-1-1 (2022)
- 南園啓太，山崎大河，忻欣，泉晋作，ムーンウォークの動作解析，日本機械学会 シンポジウム：スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス2022 (SHD 2022)，A-7-2 (2022)

連絡先　山崎大河　Tel: 0866-94-2094　　Mail: taiga@cse.oka-pu.ac.jp

バナッハ空間の単位球の幾何学的構造の研究

情報工学部　情報システム工学科　　三谷健一

バナッハ空間とは完備なノルム空間であり、RやR^{n}を基本的なモデルとした関数解析における主要な研究対象である。本研究では、バナッハ空間の単位球の幾何学的構造について考察する。今までに、一様凸性や狭義凸性など単位球の形状に纏わる様々な幾何学的性質が導入された。その性質の度合いを表すものとして種々の幾何学的定数が導入されているが、本研究では次のフォンノイマンジョルダン定数とスキューネスを中心に考え、他の定数との相互関係、具体的な空間における定数の計算を行うことを目的とする。

$$C_{\mathrm{NJ}}(X) = \sup\left\{\frac{\|x+y\|^2 + \|x-y\|^2}{2(\|x\|^2 + \|y\|^2)} : x, y \in X, (x,y) \neq (0,0)\right\}$$

$$s(X) = \sup\{\tau(x,y) - \tau(y,x) : x, y \in S_X\}$$

ここで

$$\tau(x,y) = \lim_{t \to +0} \frac{\|x+ty\| - \|x\|}{t}, \quad S_X = \{x \in X : \|x\| = 1\}$$

連絡先　三谷健一　Tel:0866-94-2082　Mail:mitani@cse.oka-pu.ac.jp

我が国おけるデジタル経済の計測に関する調査・研究動向について

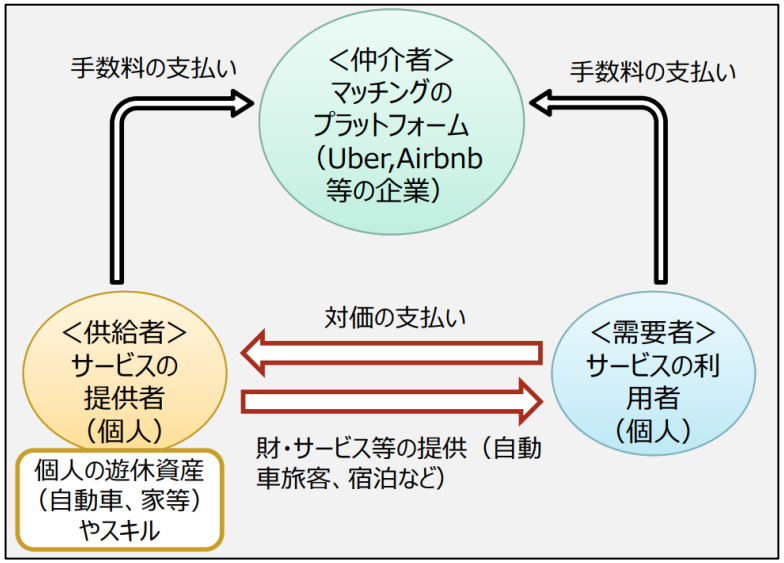
情報工学部人間情報工学科　　渡邉 淳司

ICTサービスが大きな発展と普及により、通信分野はもちろんのこと、サービス分野においても様々なビジネスが出現してきた。ビジネスの形態が変化すると、GDPの定義や概念上変更はなくても、計測方法に改良が必要になってくる。

動画配信をはじめとするインターネット上の無料サービスは、放送サービス同様、広告収入により、おおむねGDPを捕捉できると考えられている。

他方、シェアリング・エコノミーについては、GDPの計測上に課題があり、2017年から2019年にかけて「シェアリング・エコノミーの計測」に関する調査や研究会が実施されている（内閣府や経済産業省）。その後、2019年から2022年にかけて、「デジタルエコノミー・サテライト勘定の調査」　（内閣府）の実施により、研究が進んでいる。

シェアリング・エコノミーのビジネスモデル



出典：三菱総合研究所（2017）

ただ、デジタル経済の分野では、全体的に副業やフリーランスという働き方が増えてきていると考えられるが、もともと個人事業主などの経済活動は、統計調査上捕捉が難しいとされる分野であり、未だ実装には至っていない。また、デジタルプラットフォーマーが海外法人の場合、手数料の支払いを輸入として控除する必要があるが、課題として残っている。

連絡先　渡邉 淳司 a_watanabe_j2e@ss.oka-pu.ac.jp

過疎地域における地域振興と移住者の定着に関するアクションリサーチ
---鳥取県智頭町の事例---

独創

保健福祉学部現代福祉学科　樂木章子

【研究目的】

本研究は、中山間地域で深刻な人口減少と少子高齢化が進行する鳥取県智頭町に移住してきた家族に着目し、移住者の誘致と定住化に向けた方途を検討しようとするものである。

智頭町の人口シミュレーションによると、智頭町山形地区においては、2025年には地区人口は３割減の711名、高齢化率は53％となり、2060年には消滅の危機を迎える。しかし、年間平均2.5組の移住者家族が智頭町に定住すれば、人口は2060年まで現状とほとんど変わらず、かつ、高齢化率も30％を下回るようになる。

人口減少や高齢化の歯止めがかからない地区の存続を左右するのは、移住者の安定的確保と定着であることは言うまでもない。2022年現在、農林業就労や子どもの教育のために若い家族が都会から移住してきてはいるものの、世帯数はまだまだ少ない。また移住者の定住化を直接・間接に左右する移住者と一般住民の関係も明らかではない。

以上を踏まえ、本研究では今後の移住者誘致に向けた取り組みを開始するために必要な支援を行政とともに検討する。

【研究方法】

智頭町役場と協議のもと、智頭町在住の移住者（約100世帯）を対象とした質問紙調査を実施した。質問項目は、智頭町に移住するまでのプロセス、移住後の生活満足度、地元住民や移住者同士の人間関係、智頭町独自の住民自治運動との関わり等、約50項目である。質問紙調査に加えて、移住者に対するインタビュー調査も実施した。

【研究結果】

現在、データを収集中であり、分析結果は当日発表の予定である。

連絡先　樂木章子　email: arakugi@fhw.oka-pu.ac.jp

真庭市の無垢材利用を促すライフスタイルプロダクト

デザイン学部工芸工業デザイン学科　　三原鉄平

岡山県真庭市は西日本有数の木材産地であり、１９８０年代からの木材価格下降に対応し、集成材やＣＬＴ材生産に力を入れている。しかし無垢材の建築需要は依然として下落傾向にあり、製材所の技術や知見を活かす新たな用途開発が求められている。

本取組みは、現在のニーズを的確に捉えた「無垢材の新たな利活用の創造と発信」をする事により、真庭産材のみならず製材業・木工業の新たな活躍の場を創出することを目的に、合同会社わっしょいボヘミアン、建築家の富永大毅氏、市内の製材事業者、岡山県立大学との連携により実施された、真庭市林業・バイオマス産業課のプロポーザル事業である。

取組みの結果、都市部のＤＩＹ志向に焦点を当てたパネルシステム「ＢｅＬＩＮ」を開発した。２０２２年１０月２９日～１１月７日、真庭市のグリーナブルヒルゼンにて展示発表会を開催し、約１５００名の来場者が訪れた。

次年度以降は、ＢｅＬＩＮの事業化と発売に向け、体制整備と生産スキーム構築に取組む予定である。

拡張型ライフスタイル木材 ～美林～
BeLIN

連絡先　三原鉄平 tetsu@dgn.oka-pu.ac.jp

新居浜市における子育てと教育
―地域伝統行事・新居浜太鼓祭りを事例として

独創

保健福祉学部　栄養学科　　都島　梨紗

1．研究の背景

1990年代を境に、フリーターや無業者の問題が表出し、若者の雇用や自立が問題化した。2000年代に移り変わると、若者のトランジッションをめぐる困難性に焦点が当てられ、教育・労働・家族等の領域間にわたる構造的な問題として注目されるようになった。こうした若者のトランジッション経験をめぐる問題は、マクロな視点から把握されてきたが、一方で地方都市においてトランジッションを経験する若者への目配りは乏しかった。そこで、本研究では愛媛県新居浜市を事例として、地域における子どもの社会化がどのように経験されているのかを明らかにするとともに、先行研究で論じられている構造的な特性を再考することを目的とした。

２．調査の概要

愛媛県新居浜市は典型的な地方工業都市で、住友グループを中心とする製造業が盛んな地域的特性を有している。また、「新居浜太鼓祭」が有名で、地域活動・青年団の繋がりが男性を中心に結成されている。本調査では、「太鼓祭」の周辺的担い手である女性と子どもに着目し、新居浜という地域の社会化過程を明らかにする。

３．知見のまとめ

新居浜の子どもはお腹にいるときから太鼓のリズムを耳にし、乳幼児期からごっこ遊びを通して太鼓祭りに親しんでいく。太鼓祭りに全く興味のなかった女性も、子どもに付いて太鼓祭りを知るようになり、子どもが小学生頃になると、一緒に祭りに参加するようになる。このように、地域行事を通して新居浜に社会化していく過程がみられる一方、祭りに無関心な層も顕在化している。本調査を通して、新居浜における「太鼓愛」は岐路に立たされているという現状が見えてきた。

連絡先　　都島梨紗　tsushimar@fhw.oka-pu.ac.jp

NPOインターンシップ実践研究

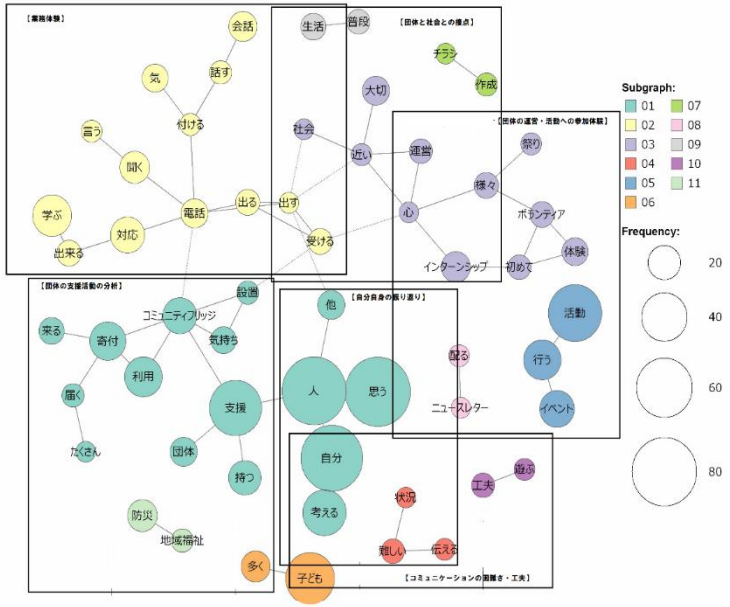
独創

保健福祉学部現代福祉学科　岩満賢次

【研究背景】多くの大学においてサービスラーニングの手法を用いた地域の問題解決型の取り組みが行われている。しかしながら、その対象が企業や行政などの職場体験要素の強いものが多く、地域の問題解決に取り組むインターンシップは未発達である。本研究では，NPOインターンシップのモデルプログラムを開発し、実験的に実施を行い、その学びの成果を検討した。

【研究の方法】2021年度、2022年度に本インターンシップに参加した学生計13名に対して、学生の記述した活動記録と事後レポートをもとに、どのような単語が出てきていたかを統計ソフトKH Coder 3を利用し、分析を行った。総抽出単語は13,141語であった。

【結果】まず頻出単語では「人」（79件）に関する単語が多く、学生が「人」をよく観察している結果であろう。一方動詞では、思う（82件）と一般的な感想の語尾に来るものが最も多いが、続いて、感じる（54件）、知る（37件）など、見たことをそのまま書いているというより「考えたこと」を中心に記述されていることが分かる。続いて、同様に学生の毎日の活動記録並びに事後レポートを同ソフトにより、共起ネットワーク図を作成した。まず、中心下の【自分自身の省察】【コミュニケーションの困難さ・工夫】からは、自分自身を振り返っていると言える。また、左上の【業務体験】や、左下の【団体の支援活動の分析】のように、右側の【団体の運営・活動への参加体験】からも実際に体験した活動を振り返っていることが分かる。そして、上中央の【団体の社会と接点】から分かるように、団体や活動の社会のなかでの位置づけを検討している。以上のことから、団体の業務体験を伴いながらも、NPO活動や社会問題の学習、そして自分自身の省察を行えていた。



連絡先　岩満賢次 iwamitsu@fhw.oka-pu.ac.jp

岡山アウトリーチによる地域観光推進事業（２）

地域

保健福祉学部看護学科　関根紳太郎　　情報工学部情報システム工学科　石井裕
デザイン学部ビジュアルデザイン学科　山下万吉

●岡山アウトリーチでは、令和3年度より、大学と地方自治体等が連携し、学生が企画運営する独自のインバウンド**観光向け地域観光推進プログラム**を展開しております。本事業では、グローバルとローカルを結び付けることのできる**地域発信型グローバルリーダー**も育成します。

●本事業は令和3年度からの継続事業であり、
【ホスピタリティ班】による観光アテンド
【SNS広報班】による主にSNSを通じた広報活動
【観光デザイン班】による観光グッズの製作
の３つに分かれて活動しております。また、参加学生は、岡山県知事より委嘱を受け、**岡山県スチューデントアテンダント**として県内の観光資源をグローバルに紹介するアウトリーチ活動を展開します。

●岡山県は豊富な観光資源を有しておりますが、知名度が低かったり、二次交通等の整備の遅れにより回遊性の低下を招いていたりするエリアがあります。岡山のそうしたエリアにアウトリーチ活動を展開することで、その魅力を国内のみならず、グローバルに発信し、アフターコロナのインバウンド観光需要の向上に貢献できます。また、地域観光推進という課題解決に取り組むことで、大学生が岡山の魅力を知り、学びながら、グローバル感覚も養うという**インバウンド型グローバル教育**が体験できます。このように、本事業は大学生が主体となり**岡山の地域活性化とグローバル化**に寄与する持続可能な活動内容となっております。

連絡先　（代表）関根紳太郎　sekine@fhw.oka-pu.ac.jp